報告　書評・芸術評

「ふつうの相談」

鹿島　美恵子 1), 2)

1）リハビリテーション・エンジニアリング 編集委員会
2）株式会社 りはっぴぃ

ふつうの相談
東畑 開人　著
金剛出版
2023年

本書は、臨床心理学・精神分析・医療人類学を専門とする東畑開人氏の著書です。「ふつうの相談」とは何だろうか。タイトルに疑問を持ちつつ、作業療法士としての日々の臨床場面をうっすらと思い浮かべながら、本書を手に取りました。

デイケアでの統合失調症患者と看護師の会話や女子大生の昼休みの会話が冒頭に書かれており、それを読んだ際に、「ああ、何となくわかるかも…」と思いました。「ふつうの相談」とは、誰もが実践している相談のことです。筆者はそれを「見過ごされてきた対人援助」、「ありふれたケア」とも表現しています。

冒頭のわかりやすい会話風景とは一変し、少しの間、臨床心理学の話が続きます。その後、第１部で筆者の臨床の具体的な風景が描かれ、第２部からは、より広い人類学的な景色へと話が進んでいきます。結論として、ふつうの相談は地球儀の中心に位置づけられていきます。そして、人と人がつながること、人が人を支えること、これがふつうの相談の根源で響いていると述べられています。

本書を手に取った時には、自分の臨床場面しか頭に浮かばなかったのですが、読み終えた時には、カフェで隣に座る人、電車で同じ車両に乗っている人など、みんなからこの響きが聞こえるような感覚となりました。予想外に、とても温かい気持ちになりました。

筆者も述べているように、一見すると、専門的な治療法が尊くて、「ふつうの相談」が軽んじられることが多いと思います。しかし、ごくありふれた「ふつうの相談」こそが効果的な場面もあるはずであり、ケアする人はもっと自信をもって「ふつうの相談」を大切に扱ってよいのだと思います。

そして、もう一つ、本書を読んで予想外だったものは、最後に補遺として収められている「中断十ヵ条―若き心理士への手紙」です。「ケースが中断したばかりで傷ついている君へ」と題された手紙は、若い自分に送りたい手紙の内容でした。今読んでも、なるほどと感じられる内容であり、本書がより身近に感じられました。補遺も含め、「ケアする人たち、すべてへ。」届いてほしい内容です。

1）リハビリテーション・エンジニアリング 編集委員会
2）株式会社 りはっぴぃ